

育児、それに伴う育児不安等の報告、報道が後を絶たない。

「育つ」を辞書で調べてみると、「(生命の有るものが)大きくなって、一人前の働きが段々出来るようになる。」一方「育てる」は、「大きくなって一人前の働きが出来るようになるまで、まわりの者がめんどうを見てやる。」とある。子どもが育って行く過程で、社会的に一人前になるようにするのが育てる事である。主体はあくまでも子にあるが、親の気持ちを押し付けることが多い。

子育ての「子」に就いて、3つの「子」を考えて子育てをしている。1つ目の「子」は現在の目の前の子、2つ目の「子」は将来を見据えての子、3つ目の「子」は自分が子であった時を重ね合わせての子である。このような事を聞いた事が有る。

この「育」と「子」の二つの考えが種々の割合に組み合わせられ、親が子育てに取り組んでいるように思える。それが子どもに良い結果又は悪い結果をもたらす場合がある。例えば、将来を見据えて過度に育てる力が働けば、子にとっては過重な負担になる。悪癖のある子の将来を案じて親が「しつけ」と思って子に摸する態度が虐待に繋がる結果にもなる。難しい事はその兼ね合いである。

所で私自身の子育て、又は子どもへの関わりはどうであったか振り返ってみると、殆ど家内任せであった。子どもが生まれてからも勤務医生活で、当時、私の勤めていた病院の小児科医は私1人であった。午前は外来、午後は往診、及び入院患者の回診で、一般病棟の他、伝染病棟もあった。子どもの病気の主流は感染症であり、抗生剤もぼつぼつ出回ってはいたが、重症の感染症が多かった。その上特に勝負の早い疫痢等目が離せないものが多かった。病院からの帰宅は遅くなり、日曜日にも入院患者の回診に出掛けた。自分の子どもへの関わりは必然的に少なく、子育ては家内に任せる事になり、健在で同居していた祖父母ことに祖母の手助けでと言うことになった。開業してからの2年間は、自宅より1時間ばかり離れた山村であった。この時は子どもが小学校の高学年になっていたので、祖父母に湧け、土曜日の夜や日曜日の朝に自宅へ帰り、日曜日の夕方には診療所へ帰る生活をしていた。子どもの幼稚園、小学校の行事には可能な限りは参加していたが、十分ではなかった。その後、岡崎で開業してからは、子ども達は中学、高校となり、日常的には親の関わりより友達のかかわりが深くなった。思えば私は自分自身の勤めのことでも手一杯になり、家内に子育てを任せてしまったと思う。今父親の育児支援という言葉が盛んに言われている。母親の社会進出の機会が多くなれば当然の結果として、言葉だけでなく、事実父親の手が必要になる。

名古屋大学名誉教授鈴木榮先生が「私の独善的子育て論」と言う本の中で、子育ては両親の責任で行うものであることを再認識するとして「子育てを母親だけでやっているというのは思い過ごしである。たとえば100%子どもの面倒は母親がみているとすれば、その際の生活費、子どもの養育費はどうするか、考えてみればすぐわかることである。子育てはこれまでも両親が協力して行ってきたし、これからもそうであるべきで、父だ母だと押しつけ合って争うことではない。」と述べられており、又日本医師会雑誌・平成13年12月15日号の小特集F「育児不安と親子関係」の中に「育児不安解消を目指して」と超して、古平金次郎先生との対談に、巷野悟郎先生は、お父さんの役割と言う事について、「近頃、夫の育児講座というものが、あちらこち

らで行われていますが、私もそういったところに参加して聞いていると、おむつの当て方とか、お母さんに対することと同じことを教えているのです。それはもちろん必要なのですが、私はやはり父親と母親が、それぞれの良いところを子育ての中に取り入れていくことが必要だと思うのです。こういうことを言うと古いかもしれませんが、どちらかという父親は力がある。そしてお母さんはやさしさがあるので、そういったところをお互いに強調して表に出していったよいのではないのでしょうか。ですから、お父さんは全体に、雄々しく見ていく、お母さんは小さいところまで見るということ、それがお互いの協力になるのではないかと思っています。」と語られておられる。

時代の流れと共に社会構造に大きな変革があった。子育てという観点から考えれば、父親の参加は当然であるから今更の感もあるが、しかし私にとって、両先生の言葉は、私自身の今までの有り様に対する、一脈の光を見た様に思える。家内は自分で育つ力を元に、育てる力を加えて子育てをして来た様に思える。その点は私も同様の思いであった。改めて家内の子育てに対する冬力に感謝している。そして現在の子を、将来は後を継いでくれたら幸であると思いつつ、しかし子どもには子どもの生き方が有るとも思ってきた。どのような職業につこうと、まっとうで、何事にも邁進できる子に育ってくれたらと思っていた。忙しさにかまけて、「子よ、育て！」と言った塩梅の私の背中を見ていたのにも関わらず、同じ小児科を姫承してくれたことは望外の幸せである。